

いっしきあおかい

一色青海遺跡(本発掘調査B)

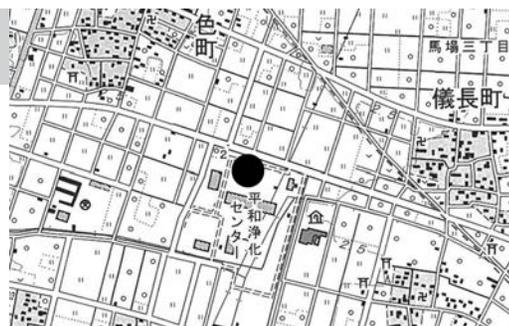
所在地 稲沢市一色青海町、儀長一丁目地内
(北緯35度14分10秒 東経136度45分22秒)

調査理由 日光川上流流域下水道

調査期間 平成30年6月～平成30年11月

調査面積 1,300㎡

担当者 酒井俊彦・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「清洲」)

調査の経過 調査は愛知県建設部下水道課一宮建設事務所による日光川上流流域下水道事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成30年6月から平成30年11月にかけて実施した。調査対象地の現況は埋め立てられた旧耕作地であり、近代の耕作土および床土を除去した1面目として平安時代～江戸時代までの遺構を扱い、1面目の遺構除去後、方形周溝墓と方形周溝墓墳丘覆土直下に検出される弥生時代中期後半の遺構を2面目として扱っている。調査面積は1,300㎡である。

立地と環境 一色青海遺跡は三宅川と日光川に挟まれた沖積低地の旧河道自然堤防上に位置している。現代の地表面の標高は東より西に向かってわずかに降るが、遺構検出面の傾斜も東から西に降る同様の状況である。過去の調査成果より、一色青海遺跡では北西から南東に流れる旧河道が大型掘立柱建物が検出されている集落中心部分で北東に向きを転じる状況が検出されている。今回の調査区は集落中心部の北東に位置し、南西から北東に流れる旧河道が調査区西半分を占め、東半分には旧河道の自然堤防が位置する。東半部では方形周溝墓によって構成される墓域、竪穴建物跡によって構成される居住域が検出された。遺構検出面の標高は東側の方形周溝墓・竪穴建物跡付近で0.7m～1.0m。西側の旧河道付近では0.3～0.5mである。遺構検出面の標高は、本調査区に隣接する南側の2009年度調査区では約1mとわずかに高いが、旧河道の流路が南から北に向かっていることで全体の標高が南から北にも降っていることや、後世の耕地整理によって削平される部分が大きかったことも影響していると考えられる。

調査の概要 今年度の調査区には、2009年度調査区北東部で確認された土取り目的と考えられる攪乱も南西部に存在する。

調査は平成30年7月に着手した。7月の降雨の多さと8月の記録的猛暑により調査の進捗は前半においては遅く、1面目の遺構掘削が完了したのは8月下旬であった。1面目の完了後、2面目の遺構として、方形周溝墓010SZ・020SZ、大溝200SDを掘削し、方形周溝墓の墳丘下で検出された竪穴建物跡や大溝200SDの下層に当たる旧河道400SDの全ての掘削が完了したのは11月中旬であった。

一面の遺構(中近世) 1面目の遺構は、表土直下で検出された大小の土坑、方形土坑、溝175SD等がある。1面目の土坑は全体的に浅く遺物の出土も少量にとどまる。

230SK(大型の方形土坑)

長軸4.17m、短軸2.23mを測る平面形方形の土坑。出土遺物には土器や木片少量があるが、これらは230SKが掘削された際に200SD上層を削平していることから入ったものと考えられる。直接的に時期を示す陶器などは見られないものの、200SDに後続する切り合

い関係や、埋土は他の灰釉陶器や山茶碗が検出された、より小型の方形土坑に類似することから遺構の年代は中世以降と想定される。

溝 (175SD、185SD)

175SDは残存長23.8m、最大幅2.6m、遺構検出面からの深さ0.2～1.1mを測る溝状の遺構で、全体が一定の深さでは掘削されておらず、延長4m～6m、幅2m、遺構検出面からの深さ1.1mの深い部分を繋いだような平面形状をしている。175SD北半部ではこの繋ぎ目に当たる部分は検出できておらず、方形周溝墓の周溝021SDとの重複部分では、021SDの堆積を175SDとして掘削した可能性がある。175SDは部分的に方形周溝墓010SZ、020SZの周溝よりも深く、2面目完掘時においても一部が残存する。

185SDは175SD中央付近で接続する溝状の遺構で、175SDで深く掘削された部分が連結した形状を示す。北を上にして見た場合、175SDと185SDの平面形状は「ト」を左右反転させた状態となる。185SDも現状の検出面上では南西方向へは連続しない。

175SD、185SDの用途については、南半部で浅く接続される部分も検出されるため、水溜め機能を併せた導水施設などが考えられる。

2面の遺構 (弥生時代 中期後半) 方形周溝墓

2面目の遺構として、弥生時代中期の遺構は方形周溝墓とその周溝(010SZ、020SZ、001SD、002SD、007SD、021SD)、竪穴建物跡(274SI、279SI、280SI、302SI、306SI、308SI、310SI、326SI、329SK、330SI)、土坑(100SK、285SK)等がある。

方形周溝墓 (010SZ)

検出面がほぼ墳丘基底部であり、埋葬施設は残存していなかった。検出時の墳丘規模は東西11.86m(残存長)、南北12.05mを測る。主な出土遺物は、周溝より出土しており、後述する周溝西側中央部で甕3点、細頸壺2点がまとまって出土しているが、周溝内埋葬等の可能性は低く、墳丘上から転落した可能性が考えられる。また、墳丘の検出中にも墳丘埋土より遺物が出土しているが、後述の竪穴建物跡が墳丘直下より検出されていることから、竪穴建物跡の遺物が包含されたものと考えられる。

010SZ周溝 (001SD・002SD)

010SZを巡る周溝。連続すると想定される遺構であるが、南東隅部分のみ調査区境によって分離するため別の遺構番号を付した。幅は2.3m～2.5mで、検出面からの深さは0.7～0.8mを測る。上層を175SDによって削平されているものの、010SZ南西部分付近でやや浅くなる箇所が確認されており、陸橋が存在した可能性がある。

方形周溝墓 (020SZ)

残存状況は010SZと同様で、埋葬施設は残存していない。東西6.54m、南北7.63mを測る。主な出土遺物は周溝より出土し、東側の周溝中からは完形の細頸壺が出土した。

020SZ周溝 (021SD)

020SZを巡る周溝。最大幅1.77mを測り、検出面からの深さは0.65mを測る。010SZ周溝と同じく、021SDも西側は175SDと重複し、削平を受けている。021SDにおいても020SD南西部付近にやや浅くなっている部分が存在するが、175SDの削平を強く受けているため、陸橋部としての明瞭な痕跡は残していない。

007SD

調査区北東部で検出された周溝。020SZ北側に隣接する、過去の調査においても未検出の方形周溝墓の南側周溝と考えられる。出土遺物には土器、磨製石斧、木片がある。本調

査区では020SZと切り合う箇所も無いため、前後関係は不明。

竪穴建物跡

竪穴建物跡の検出状況は、北側の020SZの墳丘盛り土下から周溝021SD西側にかけて、274SI・326SI・310SI・279SI・280SK(280SKはおそらく液状化現象等の理由によって形状が不明瞭だが、竪穴建物跡に加える)計5棟が検出された北側竪穴建物群と010SZの墳丘下で330SI、302SI、308SIの計3棟が検出された南側竪穴建物群が主なもので、200SD東沿いに2箇所竪穴建物跡の一部と考えられるものが検出されるが、南側のかく乱によって大きく欠損しているため、重複した状況は確認できない。

北側竪穴建物群は020SZの西側に位置する。各々の一部を020SZの周溝021SD、および中近世の溝175SDによって欠損する。前後関係の新しい順に、274SIは東西3.21m、南北4.53mで南北に長軸をもつ。326SIは東西4.69m、南北3.26mの東西方向に長軸をもつ。310SIは東西6.08m、南北3.81mで東西方向に長軸をもつ。279SIは東西不明。南北5.54mでおそらく南北方向に長軸を持つ。280SKは平面形状が不明瞭で規模不明。

南側竪穴建物群は010SZの墳丘下で検出された。それぞれの竪穴建物跡は残存状況は浅く、本来の深さよりも削平を受けており、方形周溝墓の検出時には確認できないことから、方形周溝墓の構築等に伴って竪穴建物跡が削平を受けたか、竪穴建物跡の廃絶時に多くの土砂で周囲と一様に埋没した可能性がある。前後関係の新しい順に330SIは東西4.24m、南北7.17mで南北方向に長軸をもつ。302SIは本調査区最大の竪穴建物跡で、いわゆる火災(焼失)住居。東西8.55m、南北7.92mを測る。南西側柱穴には炭化した柱材が残存する。

308SIは東西4.78m、南北2.85mを測る。北半部は液状化現象等の影響で平面形状が不明瞭となっていた。

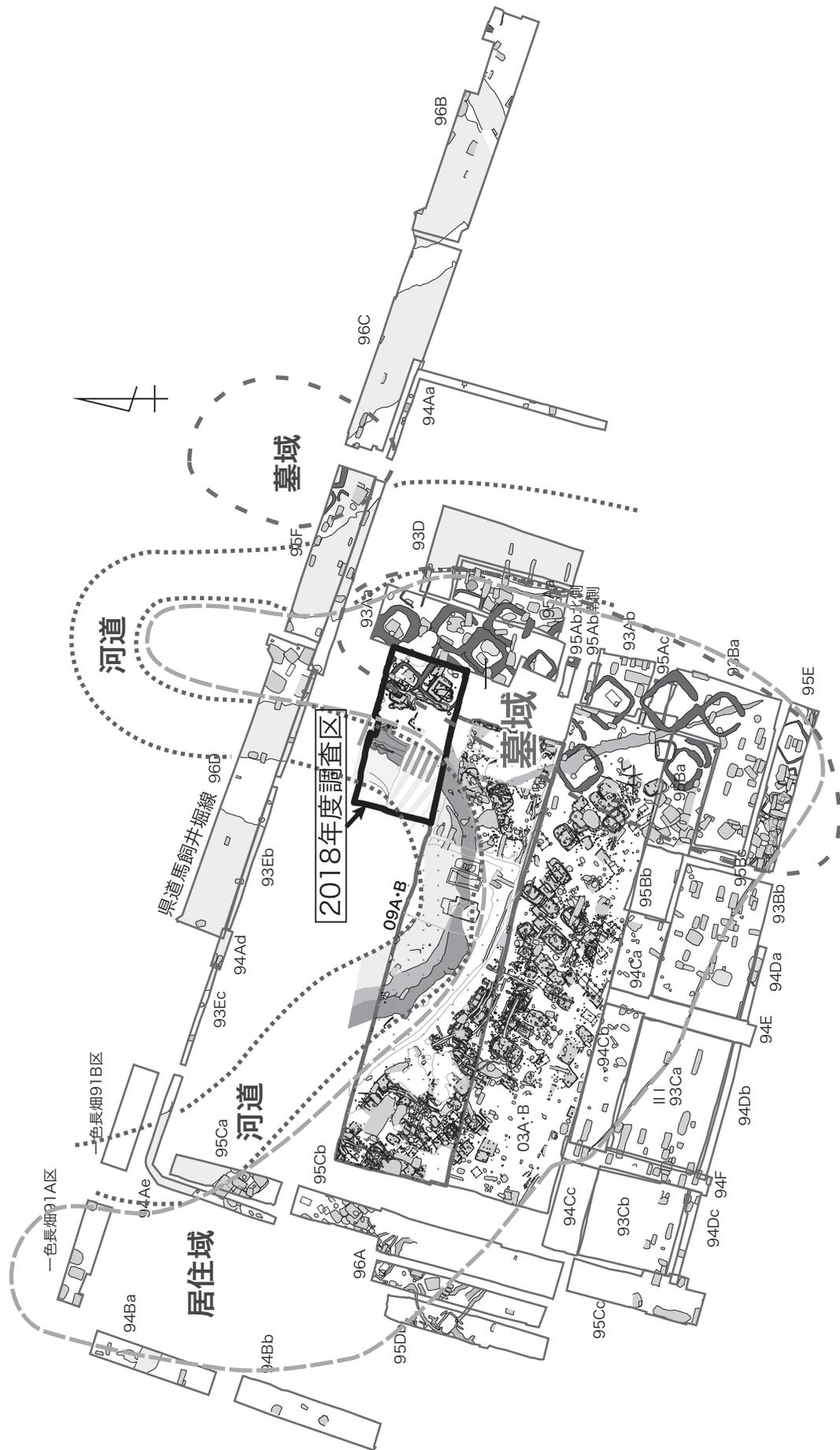
ま と め

これまでの発掘調査成果によって想定された一色青海遺跡の全体像と照らし合わせると、18区の調査区内での結果については、事前に河道、居住域、墓域がそれぞれ想定されていたが、河道は想定どおりの位置で検出された。居住域は河道間際まで展開することによって想定より西側に向かって拡大。墓域は河道からやや距離をおいて位置することが判明、東側に縮小した。居住域・墓域の存在する自然堤防は西や南西から流下する河道・溝(400NR・200SD)を北向きに変えている。09調査区で検出された200SDに先行する大溝600SDは調査区南半部分の攪乱にも影響を受け、本調査区では平面で検出できていない。断面観察では200SDが複数回の再掘削を受けていることが判明し、この中の下層が600SDに相当すると考えられる。当初は600SDが200SDより東よりに流下する想定だったが、前述の自然堤防によって向きを変え、200SDと重複している可能性が高くなった。

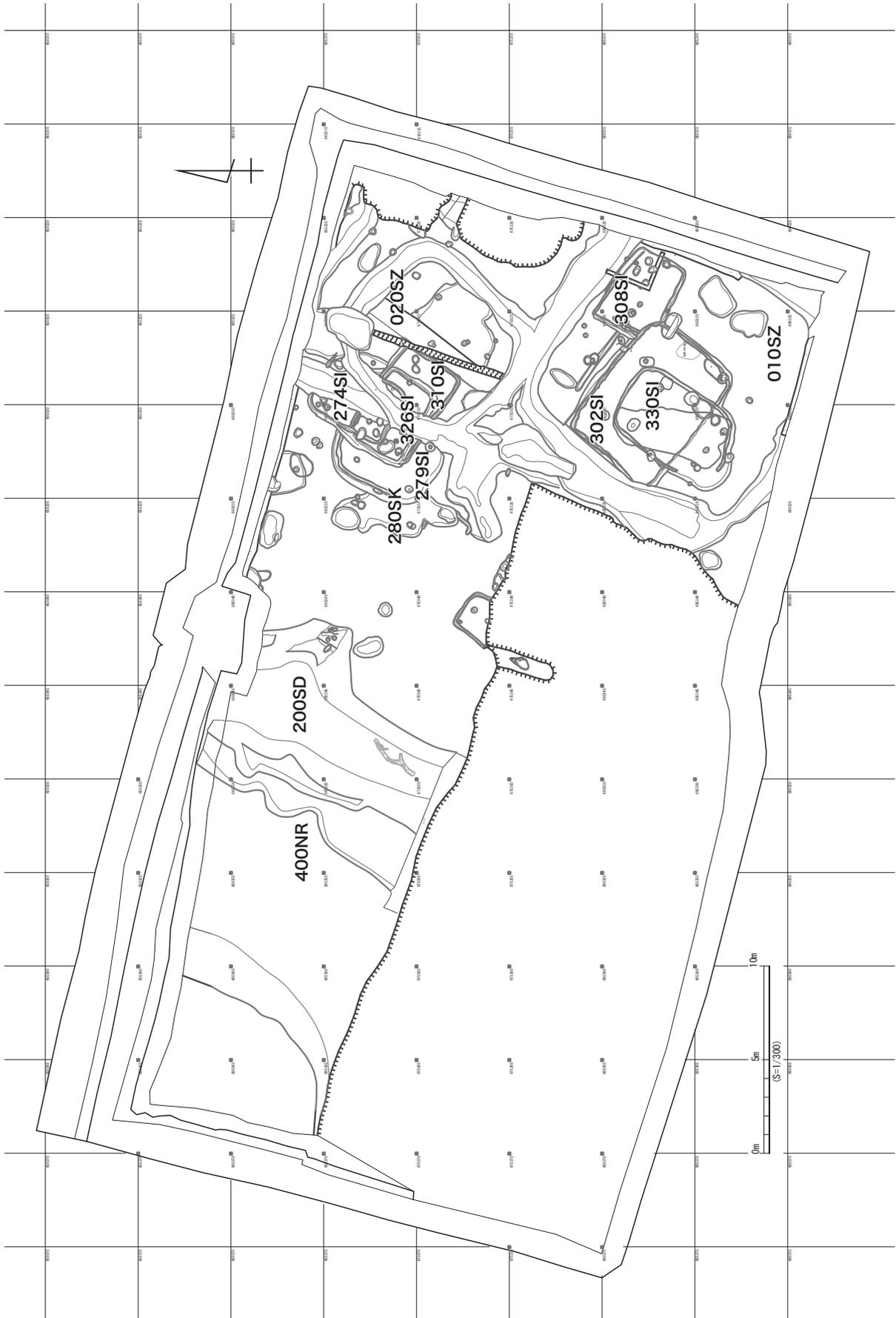
弥生時代の遺構の変遷は、これまでの調査成果によって指摘されている通り、中期後葉の高蔵式期に限定される。遺構として重複していた方形周溝墓の周溝(弥生時代遺構として最新)と竪穴建物群の出土土器に明確な時期差が判別できないため、本調査区内に限っても、北側の竪穴建物群の最大五回にわたる建替と、その後の方形周溝墓の構築にいたるまでが、計百数十年間のうちに行われ、そこで集落が廃絶したと考えられる。

過去の調査においては中世の遺構も多数が検出されているが、本調査区では中世の遺構の残存状態が特に悪く、これは近世以降の耕作地としての掘削が深く及んだためと考えられる。

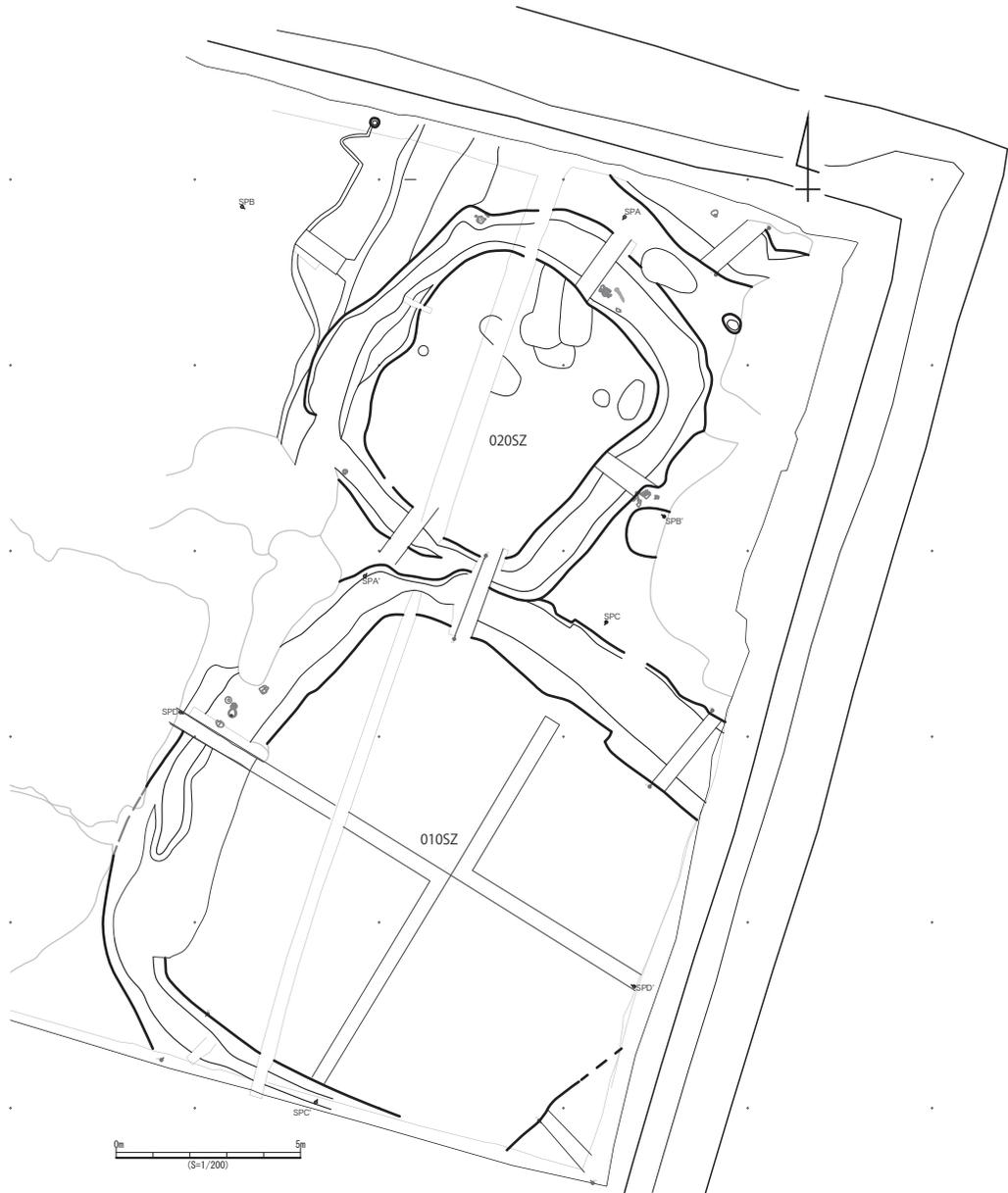
(鈴木恵介)



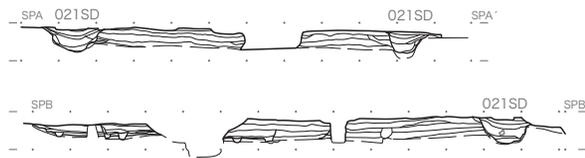
一色青海遺跡集落模式図(弥生時代中期後葉 S=1/2000)



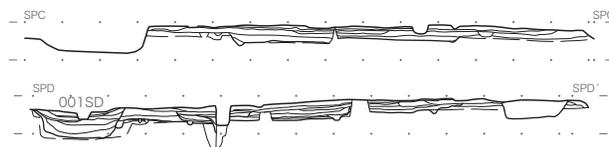
一色青海遺跡18区2面遺構全体図 (S=1/300)



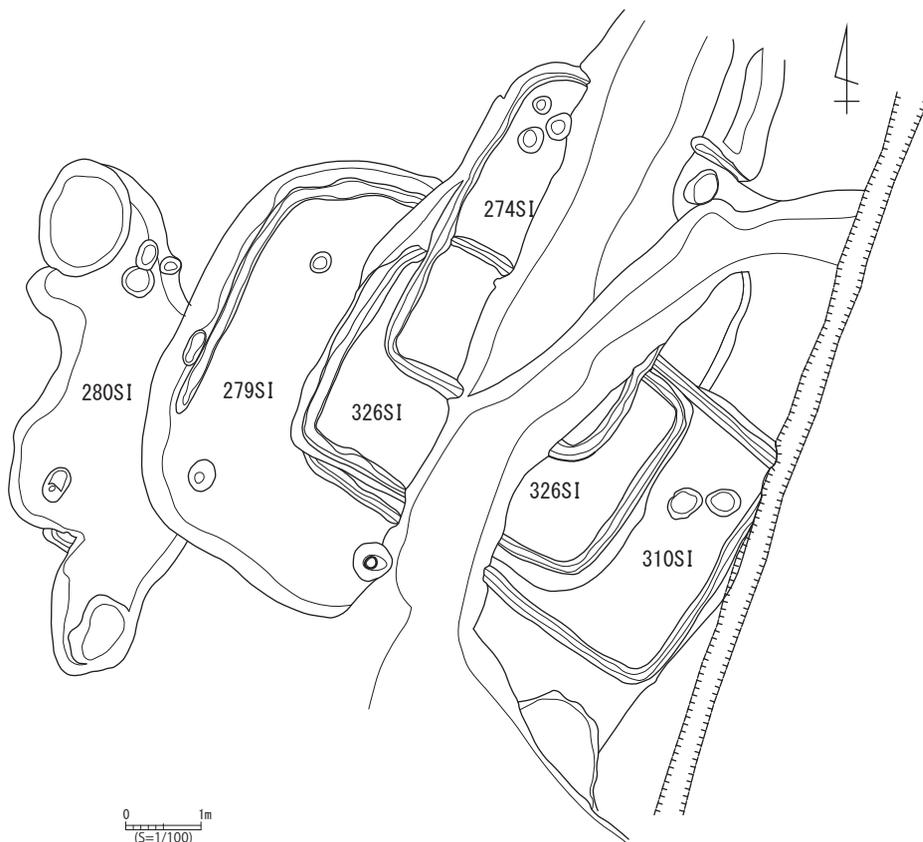
一色青海遺跡18区 方形周溝墓010SZ・020SZ平面図 (S=1/200)



一色青海遺跡18区 方形周溝墓020SZ断面図 (S=1/200)

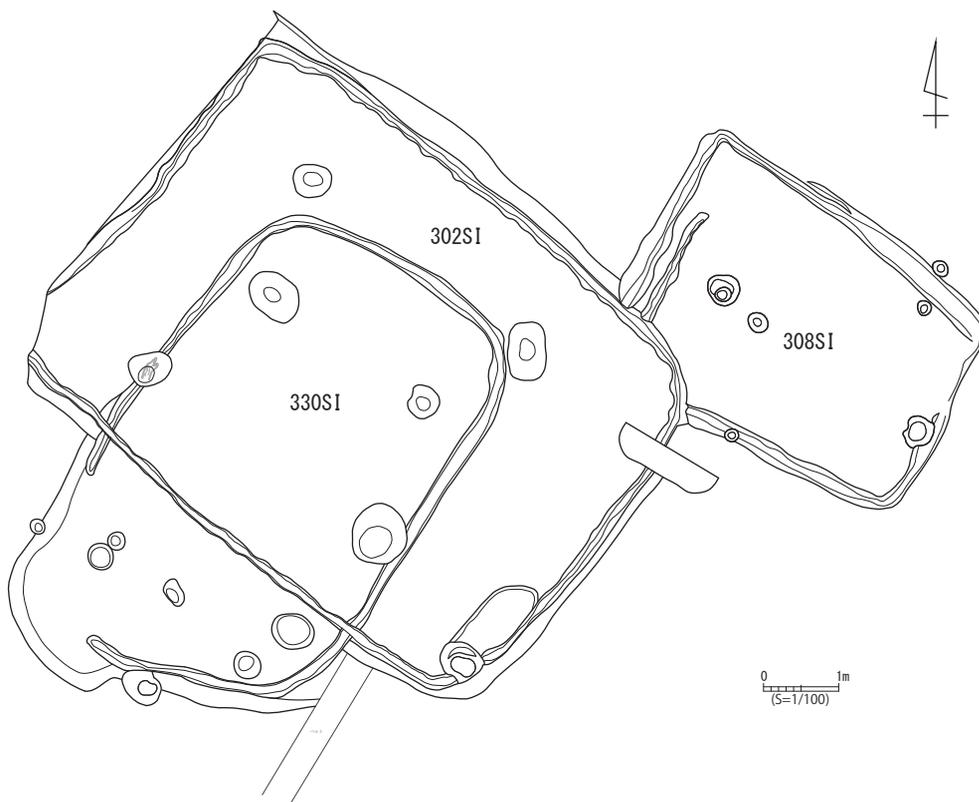


一色青海遺跡18区 方形周溝墓010SZ断面図 (S=1/200)



新しいものから順に274SI・326SI・279SI・310SI・279SI・(280SK)

一色青海遺跡18区 竪穴建物跡274SI・326SI・279SI・310SI・279SI・280SI平面図 (S=1/100)



新しいものから順に330SI・302SI・308SI

一色青海遺跡18区 竪穴建物跡330SI・302SI・308SI平面図 (S=1/100)



竪穴建物跡330SI・302SI・308SI



竪穴建物跡274SI・326SI・279SI・310SI・279SI



竪穴建物跡302SI出土土器群 (焼失時に据えられた状態)



方形周溝墓完掘状況 (手前020SZ、奥010SZ)



方形周溝墓010SZ周溝001SD出土 土器



方形周溝墓020SZ周溝021SD出土 細頸壺



溝200SD完掘状況



溝200SD出土容器未製品